新視点による「解釈と鑑賞」

山下一海

芭蕉の世界

角川選書

リズムを考察して、
「はずむ心」こそが芭蕉の
世界の真髄であるという。
出色の芭蕉論である

リズムを考察して、
「はずむ心」こそが芭蕉の
世界の真髄であるという。
出色の芭蕉論である

動的な節まわし、
リズムを考察して、
「はずむ心」こそが芭蕉の
世界の真髄であるという。
出色の芭蕉論である

リズムを考察して、
「はずむ心」こそが芭蕉の
世界の真髄であるという。
出色の芭蕉論である

動的な節まわし、
リズムを考察して、
「はずむ心」こそが芭蕉の
世界の真髄であるという。
出色の芭蕉論である

リズムを考察して、
「はずむ心」こそが芭蕉の
世界の真髄であるという。
出色の芭蕉論である

句の持つ具体的な描写、
動的な節まわし、
リズムを考察して、
「はずむ心」こそが芭蕉の
世界の真髄であるという。
出色の芭蕉論である
ばかりでなく、句作の

角川選書——161

芭蕉の世界

昭和六十年七月三十日　初版発行

著者——山下一海

© Kazumi Yamashita 1985
Printed in Japan

発行者——角川春樹　発行所——株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二丁目三番三　郵便番号一〇二　振替東京二一五二〇八
電話　営業〇三(二三八)八五二一　編集〇三(二三八)八四五一
装幀者——杉浦康平　協力——赤崎正一
印刷所——新興印刷株式会社　外装印刷——旭印刷株式会社
製本所——株式会社宮田製本所
定価はカバーに明記してあります
落丁・乱丁本はお取り替えいたします
ISBN4-04-703161-5　C0395

蕉海の世界

角川選書 161

*

芭蕉の世界——山下一海

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

*

目次

まえがき――――――一

I

一　離郷まで――――――二
二　『続山井』をめぐって――――――一六
三　『貝おほひ』のリズム――――――三七
四　字余りの世界――――――五〇
五　野ざらしの旅へ――――――六九
六　貞享三年の春――――――七四
七　鹿島の月、姨捨の月――――――九四
八　見えない世界――――――九七
九　ほそ道の旅――――――二〇

Ⅱ

一　旅吟の系譜——一一五

二　旅の芭蕉——一二五

三　辺境の詩——一四二

四　大切の柳一本——一五五

五　幻住庵と落柿舎の日々——一六五

六　閉関のころ——一七七

七　長逝前後——一八〇

Ⅲ

一　蕉風のゆくえ——一九一

二　蕉風への疑いをこめて——一九九
——益戸滄洲小論——

あとがき——二一五

まえがき

日本の文学の歴史の中で、芭蕉の果たした役割の大きさはいうまでもありません。芭蕉の築いた世界は、文学のみならず、今の私たちの日常の感性にも、深くかかわるところがあります。芭蕉に接近することによって、私たちは、自分の中にいつも何か新しいものを発見することができるでしょう。

私はこの本の中で、芭蕉の文学の種々の問題点をなるべくくっきりととらえ、それを芭蕉の生涯の脈絡において考えようとしました。文学の問題点によって生涯を考えなおそうとしたのだともいえます。ですからこれは、ただ生涯を略述したものではありませんし、また単なる論文集でもありません。問題点に立ち止まって論じている部分と、比較的あっさりと行実を解説している部分がありますが、その二種のものを組み合わせて、芭蕉の世界を立体的に描き出そうとしました。生涯自体が一つの大きな作品だともいえる芭蕉に関して、これは一つのやり方だと思います。

私はなるべく素直に芭蕉に近づき、そこに感じたものをあたりまえの言葉で示してみたい、そう

考えています。芭蕉は俳諧における初心の尊さを説いていますが、ほかならぬその芭蕉の文学に接近するためにも、初心を忘れないことが必要だと思っています。

昭和六十年三月二十七日

山下一海

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

一　離郷まで

出生と故郷

寛永二十一年（一六四四）は、十二月十六日に改元されて、正保元年となった。芭蕉の生まれた年である。誕生日がわからないので、一応、寛永二十一年生まれとしておこう。

ところが近ごろ、芭蕉が八月十五日に生まれたのではないかとする魅惑的な説があらわれた。一世の詞宗が中秋名月のもとで呱々の声をあげたとするのである。松尾弘家の家系図に芭蕉を「正保元年申八月十五日生」とすることに注目した大礒義雄氏の「芭蕉研究覚書」（昭48）に拠りながら、芭蕉の生涯にわたる名月への憧れを指摘し、そのように説くのは、白石悌三氏である（『芭蕉物語』昭52）。また、芭蕉の誕生日を十一月十一日とする説もある。易学の知識を駆使して、山本唯一氏がそのように説く（「芭蕉と暦日」昭55）。ただいずれにしても確証を欠く。

芭蕉の父松尾与左衛門は、伊賀柘植郷に住した平家末流土豪の一支族の出で、若いころ、柘植から上野に移住したようである。無足人（地侍）級の身分であったと推定されている。母は、藤堂藩

侯が転封されたのに従って、伊予から伊賀に移住した桃地氏の娘だという。芭蕉には長兄、半左衛門命清（元禄十四年没）のほか、一人の姉と三人の妹があった。姉は早く世を去り、上の妹は片野氏に、中の妹は堀内氏にそれぞれ嫁し、末妹をおよしといった。このおよしは、兄半左衛門の実子又右衛門が元禄十二年に没したあと、兄の養女になったと伝えられる。

芭蕉は幼名金作、通称甚七郎、別に忠右衛門といったという。宗房はその名のりで、俳号にも用いた。その生地は伊賀上野（三重県上野市）の赤坂町である。それは、白鳳城と呼ばれる上野の城の東側で、すぐ近くの短い赤坂を下れば、もうそこには田園がひろがっていた。赤坂町にも農民が多く住み、近くには農人町と称するところもあった。当時の官製の地図の芭蕉生家所在地に当たるところに「農人」と記されていることの意味は、いろいろに考える余地があろうが、すくなくとも芭蕉が、農民的な生活環境の中に生まれ、育ったことは確かなようである。

なお、芭蕉が、上野から十五キロほど離れた柘植で生まれたとする説もある。芭蕉の父が柘植から上野に移り住んだことはほぼ間違いないところだから、その移住以前に芭蕉が出生したことも考えられないではない。ただし芭蕉自身が意識していた故郷はたしかに上野であった。厳密な意味での生地がどこであるかは、この際あまり問題ではない。芭蕉が柘植を故郷だと意識したような形跡はまったく見られないが、上野はいつも芭蕉にとって大切な故郷であった。

二十九歳の春に上野を離れ、五十一歳の冬大坂で客死するまでの間、芭蕉はすくなくとも十回は上野に立ち寄っている。母の死後、遺髪を拝んで

手にとらば消えん涙ぞ熱き秋の霜

と詠んだのも、

旧里や臍の緒に泣く年の暮

と吟じたのも、上野においてであった。芭蕉にとっての故郷は、上野以外は考えられない。芭蕉の漂泊の意識を考える上でも、その故郷上野は大きな意味を持つものである。

俳諧とのかかわり

明暦二年（一六五六）、芭蕉十三歳の時、父が世を去った。その享年はわからない。当然にまだ年若い兄が家督を相続した。一家の心細い生活を見かねて、誰か世話をしてくれた人があったのだろうか、芭蕉は藤堂藩伊賀付士大将（さむらいだいしょう）藤堂新七郎家に勤めることになる。それがいつのことだったのか、確かなことはわからない。早く十歳前後の幼年時に召し抱えられたとの説もあるが、おそらくは成年に達した寛文初年のころのことだろう。竹冥坊の『芭蕉翁正伝』によれば寛文二年（一六六二）、十九歳の時に出仕したという。

藤堂新七郎家における芭蕉の地位は、当主良精の嫡子主計（かずえ）良忠（俳号蟬吟。芭蕉より二歳年長）の近習役であったというが、士分となったかどうかは確かではなく、台所用人とか料理人の身分であったとする説もある。

現在判明している芭蕉の作品のうちでも最も早い発句は、寛文二年十二月末に作られた。すでにその時、良忠の影響もあったのか、俳諧をはじめていたのである。良忠が北村季吟に学んだところから、芭蕉も季吟流の貞門俳諧を身につけた。芭蕉の作品を載せた最も古い書物は、寛文四年刊の『佐夜中山集』（重頼編）で、発句の二句が宗房の名で見られる。そしてその翌年、良忠の主催する貞徳翁十三回忌追善百韻俳諧に一座している。芭蕉が良忠から俳諧の上で認められていたことがわかるし、またそのことが家中での芭蕉の立場を保証するものとなっていただろうとも想像される。

ところが寛文六年四月、その良忠が二十五歳の若さで死んだ。もともと地位も家柄も何もない芭蕉であったから、自分に目をかけてくれた良忠がいなくなったことは、大きな打撃であったに違いない。芭蕉は伊賀における前途に早く見きわめをつけざるを得なかった。古伝によると、芭蕉は良忠の遺骨を高野山報恩院に納め、帰国後致仕を願ったが許されず、無断で亡命したという。ただし現実はそのように劇的ではなく、良忠没後は自然に致仕したような形になり、従前通り上野に在りながら、時おりは京に上り、季吟を中心とする俳人たちと交わり、また禅寺などに出入りしていたのではないかとも思われる。後に寿貞と呼ばれる女性が、芭蕉の内妻であったというが、そうだとすれば、その女性との交渉があったのもこのころのことだろうか。しかしこれについては、延宝初年、江戸下向後の関係と見る説もある。

寛文七年には『続山井』（湖春編）に「伊賀上野松尾宗房」として二十八句もの発句が収められ、さらに九年から十一年にかけての俳書にもその作品が散見する。

寛文十二年一月、芭蕉は上野の俳人と思われる三十七名の句に自句をまじえた六十句を、三十番の発句合とし、機知にあふれた判詞を添え、『貝おほひ』と題して上野の菅原社に奉納した。これが後に、芭蕉の最初の著書として江戸で刊行されることになる。芭蕉はその春のうちに、故郷を離れた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.